

聖ルシヤ教会30年の歩み

パウロ 太田潔

聖ルシヤ教会が30周年を迎えました。勿論このことは主のお導き、祝福があつてのことですが、大阪教区の皆さんだけではなく、日本聖公会の聖職信徒全体の祈りと協力に支えられた結果と、心から感謝しています。正確な記録などについては、10年目頃の「教会の歩み」を御覧いただくとして、この稿では是非残しておきたい事情やエピソードを中心に進めていきたいと思ひます。

1. 誕生前

1970年頃、太田(潔)の家族は金剛に引っ越して来て、所属していた聖ヤコブ教会に通うには約1時間はかかったし乗り換えも必要で、幼い子ども達だけでは通わすこともできない状態でした。教会学校には是非と思つていたので、当時他地域で教会学校(子ども会)活動をしていた川口教会青年会のことを知り、当時の牧師の村岡司祭にご相談したところ、ご快諾を得て、私の家で月1回開かれることになりました。「3、40人の子ども達が絶えず出席していたのでゲームをするのが大変でした。」(竹内司祭夫人語る)近くの子供達は殆んど顔を出したことがあるといった状況で、今でも「あの子ども会に行ったことがある」という人に出会います。1割でも教会に残っていたらなあと思うのですが、たいていは外へ出て行って地域に残っていません。しかしこの活動は、確かに子ども達の心の中に種を播いたことでした。

この活動が始まって、大人の家庭集会もと思ひ立ち、村岡司祭、当時私達が所属していた聖ヤコブ教会の宇野司祭(現主教)、パリッシュに近い聖テモテ教会の荒木司祭(故)にご協力頂いて、近くにお住まいの方が集まって、月1回定期的に開き、楽しい礼拝と語らいのときを過ごしました。

この二つの活動が定着し、実績があると認められたのか1973年教区成立50周年記念事業の一つとして、高野線沿線開拓伝道所として出発することになりました。当時の宣教態勢研究委員長山本登司祭から突然の電話で、「潔さん、あんたどこで伝道所やらんか」みたいな一言に、「ええですよ」とほんとに気軽にお受けしたのが、こんにちの悩みの種になったとは。しかしこの得がたい恵みを主よ感謝します。登先生、何時までも忘れません。

2. 教会（伝道所）がスタート

1973年12月16日最初の礼拝、「大阪教区50周年記念事業南海沿線開拓伝道所」の開所礼拝が、小池俊男主教司式で行われ、85名が出席しました。これに先立つ数ヶ月、管理牧師予定の坪井司祭と太田の二人は、どうやってスタート時のメンバーを作るかに没頭しました。第一に金剛、狭山、泉北、堺東から河内長野までの高野線沿線に居住する聖公会信徒のリストアップ、そしてその人たちの所属する教会の牧師さん達との了解を得ること、第二に周辺教会の牧師さん達との話し合いから始めました。先ず「教区の記念事業」という「錦の御旗」に教区の先生がたからは、全面的な協力を頂きました。それから各個人への行脚。前には教会へ出席をよくしたが色々な事情で教会から離れている信徒やその家族、親戚。他宗派の信徒でも同じような事情、特に近くに属する教派の教会がない方などが結構賛意を示して集まって下さるようになって来ました。その結果は次の通り。（3月迄週2回。4月正式に伝道所認可）

月日	礼拝	男子	女子	子供	合計	陪餐	その他
1/13	聖餐式	10	19	9	38	26	元旦礼拝
1/27	早祷式	13	13	8	34	—	
2/10	聖餐式	5	10	9	24	15	
2/24	早祷式	17	19	12	48	—	
合計	—	45	61	38	144	41	
平均		11	15	10	36	20	

この頃の思い出は、朝食を急いで済ますと礼拝の準備。そして今日はどなたが、そして何人来て下さるかそわそわ、門と部屋を行ったり来たりしたことでした。3月になると、教会の名前を投票で決めたり、チャリス、パテン其の他の礼拝用具を買い揃えたりと忙しい日々でした。「ルシヤ」は304年12月13日シシリアで殉教したおとめルシヤを記念したのですが、「光」をも象徴しています。当時のメンバーの考えていたことは、

- ① 全て牧師を中心に。集まってきて自分はメンバーと思っている人がメンバー。
- ② 赤ちゃんや小さな子供がどんなに騒ごうと決して叱らない。その代わり皆で寝る。
- ③ 何をするにも楽しくみんなです。特にお金を貯めよう。
- ④ 月に一度は、誰かが証をする。
- ⑤ 家庭集会や野外礼拝を積極的に。

などなど、自然に「おきて」ができていきました。4月からは、毎週礼拝が捧げられ教籍も置かれるようになったのですが、教籍のことはあまり気にしない雰囲気でした。礼拝の後は食事、たいてい夕方近くまで賑やかに過ごしました。こうして第1年は、雑然とした中で歩みをはじめていきました。

2. 聖飯場教会まで

4月から順調に「開拓伝道」は始まっていきました。この稿を書くに当たって、週報、信徒総会の資料、其の他残っている文書・写真などを数多く見直しました。個人的な懐かしさは当然あって、時間を費やしました。今考えてみると、自分達は新しいこと、他の教会ではやっていないことをと考えて教会活動をしたのですが、実際は手法としては目新しいことではなく、オーソドックスで当たり前のことをしていたのだと気づきました。しかし、もしも他と違ったことがあったとしたら、皆が同じ方向に向かって、時には意見の違いがあつたりしても一体であつたこと、この教会での信仰生活に参加していることへの喜び、更にその輪を広げようとする熱意、そして誰もが主人で、お客さまはいなかったことなどでしょうか。客観的には、30代～40代が中心で赤ちゃんから高齢者まで適度な年齢構成であつたこと、同じ地域に住むメンバーであつたこと、そしてグループとして発展できる基礎数が始めから与えられたことなどでしょう。

最初の1年、準備期間とも言うべき時間が過ぎ将来への希望が見え始めたとき、皆の希望は「専任牧師」が与えられることでした。坪井司祭は桃山学院のチャプレンが主でルシヤは主日勤務でした。先生はいつもニコニコとみんなの活動を見守って下さいました。そして皆がしようと決めたことがうまく運ぶように手配されました。このお人柄がこの教会のDNAを決めたのでしょうか。しかし皆は日常の活動の中で、日曜日だけの教会では物足らなくなったのです。専用の場所も必要でした。こうして教区に願いを申し出ました。この頃の教区との議論は、教会の「中堅の(経験のある)開拓伝道ができる方」を欲しいのに、教区の「若い(=情熱がある、給料が多くない)方」という違いでした。この頃はいまからみるとこんな贅沢なことが議論できたのです！決してこの過程では個人の名前は出ませんでした。そんなプロセスの結果、浦地司祭の派遣が決まりました。先生が赴任されて、教会活動は日常的に始まり、活発化し、信徒の数も出席者の数も増えていきました。メンバーの皆が浦地先生のもとで、ケンカもしながら一つにまとまっていきました。

- ① 信徒の居住地、交通の便利を考えた地域グループを作りました。金剛・狭山・泉北・河内長野・堺東部などで、定期的に家庭集会が行われました。
- ② 運営委員会が組織され、婦人会、教会学校、青年会、男子会などの定番と、インタレストグループなどが個性的な活動を始めました。
- ③ 活動が活発化するにつれ、私宅利用の限界がはっきりして独自の場所が必要になり、自然と教会建築の流れができました。
- ④ 「先ずお金を貯めよう」「自立しよう」(援助金を教区から受けていた)が合言葉で、衣類の販売・ルシヤーンの製造販売など、かなりの利益を得ました。どちらも原価は僅かでしたから。教区の皆さんはじめ顧客みんなに感謝します。

建設の土地探し、資金の確保の方法、幼稚園の併設はどうか、学校との協働はなど議論

の種は山ほど。委員会は深夜までが常で、礼拝のあとも話し合いが続いたことでした。教区との話し合いも持たれましたが、「そんなことはできる筈がない。」という教区と「絶対やれる、いややる」というルシヤの姿勢は中々一致しませんでした。今考えると、教区（常置委員会・財務委員長など）は常識的で決して間違っただけを言っていないのですが、とにかくやらなければならなかったのです。

なんとか土地も見つかり、教区も説得し、募金キャンペーンも始まりました。本当に大阪教区だけではなく、日本中の教会から好意と励ましが寄せられたのには驚きました。又、支払資金の必要なときには、必ず必要なだけのお金がありました。私達はこのことを「奇跡」と信じています。土地が良すぎて予算が不足、建物は仮設用を恒久的にしたものを利用しました。「聖墳墓教会」をもじって「聖飯場教会」と名づけました。最後には献堂式にお集まりの皆さんに、まだ出来ていない垣根の1本づつを買って頂きました。本当にそれで垣根ができたのですよ。

3. 伝道所から教会に、そして新建築

I 宣教の流れ

建物ができて一番恐れていたことは、安心してしまわないかということでした。そこで考えたことは、

- ① 目標設定とそのためのプロセスのプログラムをたてること。
- ② 信徒の信仰を強める為の祈り、学び、行事などをきちんと実施すること。
- ③ ルシヤはあくまでも「伝道所」であることに誇りをもって、先ず伝道すること。
- ④ 「宣教の中心は礼拝」であることを大事にする。

などでした。そしてルシヤは1982年借入金を返済し、新たに本建築を目指して建築献金勘定を継続することになりました。現在受聖餐者が60名を超え、教区代議員を2名送ることとなりました。更に85年牧会援助金を辞退し完全に自立を果たしました。この間1983年3月浦地司祭が転任され、4月から山本真司祭が赴任されました。

実はこの頃が聖ルシヤの最も充実した時期かも知れません。このあと借入金の返済が終わった頃からは主要なメンバーが欠け始めたからです。目に見えない戦力の低下、信徒の子弟が進学、就職、結婚などで他地域に転出するなど信仰の継承がうまく進まないなどの傾向が始まりました。このことは、関西地域の新興住宅地に共通の問題でした。予測出来ないほどの都市環境の変動、東京一極集中、同年代が居住し始めた場所ですから、一緒に高齢化していくに伴って転勤から始まって前述の子弟の流出。教会学校が成り立たないなど、教会は何の対策も持ち得なかったのです。教区の社会問題最優先は、この頃から「教勢」を弱めていったとも考えられます。勿論社会問題も同じく重要なのですが。

87年山本司祭の転任と、そのあとの久保司祭の管理とマッキンタイア宣教師（当時）の週3日勤務、とつづいて原田執事の司祭按手を待って89年5月原田司祭の専任時代

へと変わっていきました。この頃山本司祭時代から始まった新会堂建設が最大のテーマでした。この頃から内部での対立が起きました。とにかく現在地に、に対してこれからの地域の発展の様子を調査してマーケティングをやり直そう、その結果によっては移転もやむを得ない、の対立です。更に教区主教から何故か、2度に渡って「教会設立」の指示がありました。今でもこの趣旨は理解できません。ぜひご教授下さい。「泣く子と主教（常置委員会）には勝てない」世界ですから理の如何によらず、ご指示どおり教会設立と、現在地への建築が決まりました。これまでの対立と説得力のない解決方法は、これから後の教勢衰退へ大きな影響をもたらしました。

II.新しい建物

92年の信徒総会で建築が確定し、建築委員（長：太田潔）が任命され、スタートしました。先ずコンセプトを次のように固めました。

- ① ボリュームの制約から、礼拝堂の充実を第1に。特に1階に置き天井高を十分に。
- ② 騒音の厳しい場所なので、影響を受けない工法をとる。
- ③ 玄関前に十分なスペースをとる。
- ④ ボリュームとコストの面で、残念だがエレベーターは入れられない。
- ⑤ 予算は7,000万円とする。

そして数社に建設案を依頼し、展示後投票して「穴吹工務店案」を採用しました。その後礼拝堂の諸設備を、次のように決めていきました。

- ① 本格的ステンドグラスの採用→イタリア所在のサンテ・ピッツオール工房に依頼。テーマを「創造の光」とし、原画を送ってもらい承認した。（同氏は世界的作家。）
- ② オルガンは、教会用電子オルガンとして定評のあるアーレンを採用した。
- ③ 音響について→音楽はきれいに、祈祷書の読み・説教などはクリヤーにという二律背反を解決するのにスピーカーの位置をコンピュータで決定し取り付けた。
- ④ 礼拝家具は、無垢の木製家具（価格面で韓国製）を。しかし日本と外国との家具の概念が違い結果として失敗した。今後の課題である。（今までに一部直した）。納骨堂家具も同じメーカーで後に設置、金具が問題として残る。

その他、内外壁は打ち放し工法を採用しましたが、一部から何故壁は塗らないのかとお叱りを受けたのも良い思い出です。土足で入れる、大きな台所は作らない、できるだけ備品は置かないなどの、細部のコンセプトも決めました。予算と実効性の問題で外部看板や大きな十字架が不十分かもしれません。

将来への展望

礼拝堂はできました。借入金の返済もすみました。けれどもいま、定住牧師がいない。信徒も、来会者も献金も減りました。高齢化も進み数年で家族数はもっと減るでしょう。本当にいま、将来を見据えて抜本的な解決法を教区とともに見つけ出さなければならぬのです。教区にも、もう余力はないのかも知れませんが、いま、この30周年を期してルシヤの復活を目指しましょう。ルシヤの生まれたとき、そこに希望の「光」がある

のでは、と30年を今振り返って思います。ヒントは此処に！